



ゆうすい



# 三島ゆうすい会 20周年記念誌



ゆうすい



# 産卵せよ富士

大岡 信

1

回り疲れた天の車体の  
よこれ吹つとばす  
洗車のしぶきよ  
太陽の最初の光よ

2

さへぎるものない  
火の矢となつて  
富士の子宮を灼きにくる  
かの太陽の精子の流れよ  
プロメテウスは立ち去つたが  
役ごとの行者は今も健在  
夜ごとき夜ごとき彼は走る  
猿(まゐ)のごとく 飛ぶ(と)のごとく  
「馬の背」の 「剣ヶ峯」の  
深さ二百メートルの火口壁で  
行者は叫ぶ 驚と風を

おお 心よどうして  
暗い闇にうづくまるのを  
そんなに好むの？  
わがうちなる  
数知れぬ まなご 心よ  
怒りと羨望  
嫉妬の吐血に苦しんで  
宇宙のよどみで  
海鼠になつてさ

3

山林は眺望を生み  
眺望は人を養ふ  
大いなる眺望の中に  
無数の鳥が舞つてある

4

登山道の彼方には  
宇宙のはてから到着した  
ほのかな光の霧が漂ふ  
ミジッコは東に  
フランクトンは西に  
カゲロフは南に  
宇宙の光の漂ひの中で

支配する大法螺貝で

すると光は歓喜に溢れ  
朝だ朝だと呼びあひながら  
なだれてゆく  
甲斐と駿河の谷と川へ

昔 富士の水を飲んで  
砲撃を逃げまはりながら  
あこがれを知つたこともなりし人よ  
明かるい朝を  
どうしてそんなに拒むの？  
光へのあこがれは  
おれたちの疼く命の  
吐く息 吸ふ息  
おれたちのうちなる嵐  
ではなかつたの？

キツネ イノシシ モモンガも  
山頂の眺望を  
ヒト科ヒト属と分かちあはうとする

ヒメネズミ ドブネズミ ハタネズミらは  
頂きへ 頂きへ  
岩石の森を匍ひ登つてゆく

5

若い火山にふさはしく  
すこやかな緑の  
裾長き円錐の山よ  
孤立した大地の乳房  
浄らかな地下水の宝庫  
大空に蒼く融け入つて  
ふたたび浮き出る一枚の山よ  
息づく富士山  
ぼくは知つてる  
きみの体の内側の  
玄武岩熔岩層の  
隙間を縫つて  
ピシヤリ ピシヤリ  
滴り落ちる地下水の

ある水脈は  
百年以上の歳月ののち  
麓のまちに  
やうやくにして辿りつくのだ

ぼくはその麓のまちに  
生ひ出でた者  
月見草とミミズの棲む  
貧しい庭の掘抜井戸に  
ぼくはきみを映して飼つた

練兵場の松林には松の花粉  
奈良橋をらはしのアスハルトには  
憲兵大尉の馬糞まぐさの埃  
そしてきみはいつの夏も  
清冽な水となつて流れた

小浜池(こはまがけ)にも 柿田川(かきだがは)にも  
鮠(はら)は丸太・鮎(あし)のきらめき  
きみの流れで泳ぐとき  
ぼくらのおくからむちんぼこも  
たちまち縮んで  
豆粒のピストルになつた

唇を紫に染め  
ぼくらはきみをあがめ得ただけ――

6

ぼくらはいつせいに思つたものさ  
富士山の詩や絵なんてもなあ  
恥づかしくつて 恥づかしくつて！  
風速三十五メートルの  
濃霧の山頂ドームを出れば  
人影は墨絵のごとく  
墨絵にすぎない

この時も  
大沢崩れは山頂へじわじわ伸びる  
富士の腹は徐々に割れる  
大爆発の時は近づく  
(地質にとっては千年も一瞬)  
マグマは大地の真赤な卵だ  
真赤な卵は新たな創造  
役ごとの行者は夜ごときに走る  
新しい富士の卵を  
抱きあげんとして

火と水の二大元素が  
きみの深い下腹部の容器の中で  
つひに出会ひ 恋し合へば

その瞬間  
歓喜に裂ける灼けた岩石  
その瞬間  
循環するすべての生と死  
交換されるすべての性と詩  
かくて  
破壊がすべてを新たにす  
産卵の時 到るべし  
おお われら無きのち 大洪水の  
産卵の時 到るべし。



三島市の中郷温泉池からの富士山

詩集『故郷の水へのメッセージ』大岡 信 著  
一九八九年刊  
発行所 株式会社花神社(くわしんしゃ)  
※本誌への詩の掲載は、大岡 信氏のご厚意に  
よるもので、一同、心より感謝申し上げます。